

山家むかし語り (一)

大平安行

はじめに

今年から山家町の歴史について自治会として調査をすることになりました。

平成五年から、一部の有志が地域の方々と予備調査をして、内容、まとめ方、可能性などについて検討してきましたが、今後二ヶ年の予定でまとめたいと思います。

人は自分を育んでくれた自然環境や懐かしい人々について、いつの日か思いを馳せるときがあると思います。

遠い昔はともかく、この山家の里に多くの子どもたちの騒々しく賑やかな声と、若々しいお母さんの弾んだ声の流れていた時代はいつしか過ぎ去って、住む人の数も半数くらいになり、静かな時を迎えているようです。これも暫らくのことで、他所で人生の峠を過ぎた人々も、故郷の思いに惹かれて帰ってくることでしょう。

別府、浜脇ということばとともに、その起源やいろいろな伝承については、子どもの頃から聞かされていますが、「山家についての言い伝えや昔語りは、あまり聞いていません」といわれる人が多いのですが、なかなかどうして山家の里にも多くの史跡や昔話があることが分かってきました。

別大海岸は、今でこそ立派な舗装道路ですが、徳川時代までは、人々は潮の干満の合間をみてやっと通ることができた。府内には、別府浜脇から舟で行くか、小倉街道（豊前街道）を浜脇・山家・赤野・赤松と登って銭瓶峠を越えて、城ノ腰・柞原（うすはら）・生石・勢家を経て府内の城下へゆくのが普通でした。ということは、この山家の里は、幹線道路の要点に位置していたことになります。

また、豊後の英雄大友義鎮（よしみ）（宗麟）の浜脇館が、現在

の浜脇中学校の体育館付近にあって、有名な二階崩の変
のときに義鎮がここに居たことは記録にあります。

昔のことを知っている人もだんだん少なくなってきました。
した。できればこの機会に、山家の里の伝承、風習、行
事などを掘り起こして、これからの人々に伝えたいと思っ
ています。

「山家」の地名のいわれ、経緯

昔の(昭和を含む)書きもの、絵画、写真

昔の農具、工具、漁具・玩具など

昔話や言い伝え、お祭りや行事

宗教的な石造物、木造物

その他参考になりそうと考えられるもの

をご存じの方は、次の編集グループの

- | | | | | | |
|-----|---|-------|-----|---|------|
| 一組 | 二 | 時田芳和 | 二組 | 二 | 大嶋文彦 |
| 三組 | 二 | 吉岡隆安 | 四組 | | 大平安行 |
| 一一組 | | 加藤政昭 | 一一組 | | 首藤治世 |
| 一一組 | | 小松武勇喜 | | | |
- にご連絡ください。

一 山家部落の発生について

(一) 横穴古墳群

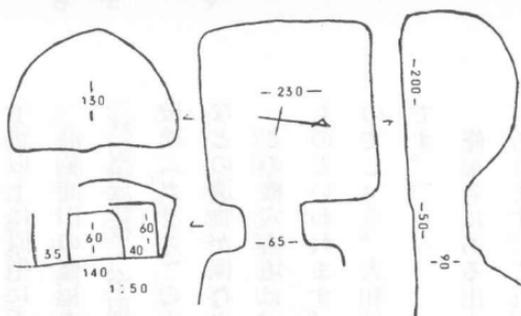
山家に関する一番古いと思われる手掛かりは、金比羅
山と穴森の横穴古墳群です。

東別府駅から西の方向に仰ぎみる感じで金比羅山が迫っ
て見えますが、その東側の山腹と、さらに西の芝尾墓地
の近くの山腹に古代人の横穴古墳のあることは、案外地
元の人にも知られていません。千数百年の歳月に耐えて、
予想以上に原型に近い状態で保たれています。

浜脇浦田の修福寺に、これらの横穴古墳から出土した
「鉄製彎鏡板・金環・銀環・勾玉・管玉・切子玉・白玉・
玻璃(ガラス)の小玉・鉄鏃・鉄釘・須恵器破片・土錘」
などの遺物が保存されています。

この横穴古墳は、およそ六世紀後半から七世紀前半の
ものといわれます。飛鳥時代から白鳳時代にかけてのも
のでしょう。大和地方では仏教や大陸文化が花開いた頃
です。

修福寺にある出土品のなかに、漁網の錘であった土錘
があります。これが横穴古墳の中に副葬品として遺骸と



平原 横穴古墳（第四号）

実測図 入江秀利

ともに葬られたということは、被葬者は漁撈者の有力者であったのではなからうか。

古墳時代の別府市には、北石垣の春木川を中心にして水田耕作を経済基盤とする氏族と、朝見川の川口の入江を中心とする漁撈を経済基盤とする氏族（南方より渡来した安曇族）の二部族が住んでいたといわれます。

（二）海進時代における浜脇付近の海辺の状況

古代から近世にかけて朝見川の川口は、湾入して入江になったようで、地形をくわしく調べてみると、古代にはこの入江は八幡朝見神社付近までも入込んでいたと考えられます。

古代から近世までの木造船の停泊にはもってこいの港があった。この入江を中心に、古代海上交通および漁撈にたずさわった海人族が居住していたといわれます。

さて、古代から近世の間において、朝見神社付近まで「海進」があり、船舶の出入りがあったとすると、現在の地図で等高線二〇〇〜三〇〇米の地域となるようです。

地域の地形を観察すると、海進の時代においては、現在の浦田と山家および両郡橋付近は、かなりな入江であったことが想像できます。

浦田について観察すると、辞書には、地名の浦は「海や湖の湾曲して陸地に入込んだ所。海辺、みずぎわ」と書かれています。また、明和三丙戌四月の「漁船廻船開場証文」の宛名、浜脇・田野口両村船持中、の宛名から判断すれば、現在の浦田付近は入江で、漁船を使用した漁撈などを営んでいたことが推測されます。ただし、海退のために漁港を失った明和当時の田野口（浦田を含む）の漁民は、「漁業権」を持って浜脇船付場を利用して、漁業に従事していたのかもしれませんが。

山家については、金比羅山の展望台を背後にもつ「浜脇中学校の台地」と、江戸時代からも魚見台として知られている「赤松の台地」を両翼にもつ「山家の入江」は、有能な港としてまた必要な農耕用地も確保できた農漁村

として利用されていたものと思われます。当然ながら現在の浜脇居住地域は海底に没しており、現在の山家から浦田付近の丘陵斜面「浜の脇の地域」に住んでいたものと想像されます。

地形図で「山家の入江」での等高線二〇〇〜三〇〇米を海岸線と考えると、現在の浜脇中学の台地から、浜田橋、九組の二辺りから市宮住宅裏の（旧マーヤマ）掘削斜面の上の線、十組の一赤野台地からおよそ二〇〇米下になり、最大幅三〇〇米、奥行二〇〇米の入江になり、かなりの舟が係留されたと思われます。現在は日豊線の土手が海岸線を塞いでいるので入江（港）の感じをなくしてしまっています。

二山家の地名について

山家は、角川の日本地名大辞典をみると、

「明治から現在に至る通称地名。速見郡浜脇村（のちの浜脇町）、明治三九年から別府町（のち別府市）大字浜脇のうち、東別府駅南部の丘陵地帯。明治四二年の市区改正により赤野と合わせて公式の山家区となる。」と出

ています。

(一) 地名の発生

山家の地名はいつ頃から使われていたか、古文書を調べてみましたが、明治以前では確認することができませんでした。

明治一六〇一八年の「地券名寄帳」(土地台帳)に、速見郡濱脇村字赤野、ガラン田、谷ノ浦の地名は確認できましたが、「山家」の地名は見出せませんでした。

明治一五年の「地価取調帳」の「大分県各町村字小名取調書」に字として「山家」が明記されています。これは、明治二二年の「町村制施行」に際して新たに付けられた大字、小字の区分の前に使われていた地名区分といわれます。

地番・地号見出帳の明治八年に、

字山家向 持主 首藤甚平

字山家 持主 糸永久平

田 三畝拾貳歩五厘

畑 三畝歩

字山家 持主 糸永幸藏

とあります。明治八年(一二四年以前)地方行政組織の

公文書に「山家」の地名が見られることは、以前から集落として存在していたことは確かでしょう。赤野は「豊後国志(一八〇三)」に「(濱脇村の)枝村として赤松村のほか赤野村をあげる」の記録があるので約二百年前の徳川時代から存在が確認されています。

(二) 字名について

町内の地名は通称字名でよんでいます。字は一の坪・峯・赤野・辻・田淵・山家・伽藍田・谷の浦(裏)・神の木の九個の小字からなっています。

山家は、地区の中心部を流れる浜田川にそって、現在は七・八・九および一一組で、北向きの場所ですが昔から住居地域であったため、昔からの方が多いようです。

神の木は、北側は浜脇中学校の敷地と東は日豊線、北は金比羅山山麓の道に囲まれた地域で、一組と一一組の字名は、「歳の神」や「秋葉さま」のご神木に由来するのでしょうか。

谷の浦は、地区の中央に位置しています。二・二および三・四・五・一・五・二組、並びに六・八・九・一・

九―二組があります。谷の浦の「浦」は海辺を意味しています。時代とともに海面が下がり、今のような凹地になり、浦と裏が混同するようになったと思います。

伽藍田は、山家の上手にあります。九―一組および九―三組です。珍しい地名ですが昔この付近に伽藍(寺)がありました。珍しい地名ですが昔この付近に伽藍(寺)がありました。衰微して廃寺になり跡が田になったと伝えられます。再興された寺が崇福寺であると由緒書にあるそうです。言い伝えやお寺に関係のある遺蹟があればお知らせ願いたい。

峯は日豊線とマ―山に面した、昭和の初め浜脇海岸埋



一の坪 ほうきょういんとう 宝篋印塔 (文政五年五月)

め立て工事に際して造成された地域です。七および二組の一部と、一三・一四・一五組や市営住宅や警察の独自寮があります。

一の坪は、地区東側の中央に日豊線に沿って、五―一・七―三組で、線路の施設前は一番地味豊かな水田地帯であったそうです。

赤野は赤野集落と峯に接する市営住宅から成り立っています。丘陵部の赤野集落は、県道中村く別府線に沿っておよそ二〇〇年からの古い歴史をもつところです。銭瓶峠を越えて府内の城下に通じる豊前街道(小倉街道)に沿って一〇―一・一〇―二組が点在しています。昔は街道沿いに耕地がありましたが、今は住宅地に変貌しつつあります。

高崎山城の合戦や赤野城、赤地藏など歴史や民話を秘めた場所であります。

田淵は赤野台地の北に隣接した平な高地で、一時びわを栽培したこともありました。

辻は南部台地で両郡橋に接しています。辻団地として造成され一〇―三および一〇―四組があります。(つづく)

